

PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

「二人」は、いつもいっしょ

新しい命に対する責任も

教理委員長 糸永 真一

世の中には、二つのことが一つになっていて、それを二つに分けたら意味がなくなるものがあると思います。性や結婚や家庭の中にもそういうものがあります。

1 性と人格は一つ

性はその人自身である人格と一体のもので。ですから、性と人格はもともと分離することができません。性は、人格の尊厳に深く結ばれているから、尊いのです。その上、人格が目的であって、何かの手段にされてはならないように、性も、遊びや金もつけの手段とされてはならないのです。性をもてあそんだり、売り物にすることは、つまり、目的である自

分自身を卑しめ、これを手段としてもあそんだり、売り物にしたりすることにほかならないのです。

2 夫婦は一つ

結婚は、人格としての自分を愛をもって完全に与え合う約束ですから、夫婦は一体でなければならぬものであり、一夫一婦でなければならぬものです。しかも、この一体性は生活や夫婦行為においてばかりでなく、そこから生じるすべての責任においても一つでなければならぬのです。

3 夫婦行為の目的も一つ

夫婦行為には二つの目的があると言われます。夫

婦の一致と子どもの出産です。しかしこの二つは、実は一つに結ばれたものであって、切り離すことができないのです。夫婦行為はいつでも出産を伴うと整っていけば、いつでも伴

い得ることです。ですから、夫婦行為を行うときは、夫も妻も、「もし妊娠したら、喜んで新しい命を生んで育てる」という心を持つことが大切で、そういう心があれば、二人の行為は喜びと希望に満ちたものになるでしょう。しかし、夫婦行為から出産をあ

くまで切り離そうとすれば、心配だけが先に立つて、夫婦の完全な一致も危

なくなり、非合法の避妊は夫婦の一致を傷つけ

たり、壊したりするので

4 母性と父性も一つ

妊娠から出産までは妻(母親)の仕事と見られており、物理的にはそのとおりです。しかし、夫の仕事がなくなるわけではありません。少なくとも精神的な面で、妊娠から出産までの間も、夫は妻につき添い、父親としての務めを果たさなければならぬのです。父性と母性は、共同の責任で行った夫婦行為に伴うものとして、一つの新しい命に対する共同の責任なのです。

クリスティーナを欲しくなかったのは

いったい誰なのか。

水曜日之夜、とても不安
そんな夫婦が私の執務室
を訪れました。彼らが私に
何の用があるのか、私に
は、全く見当が付きません
でした。彼らは少し見覚え
があるように見えました。
もしかしたら、日曜日のミ
サで会ったことがあるか
も知れません。

少し緊張をほぐす会話
をしてから、用件を伺いま
した。ソコー口は自分が妊
娠していて、医者からとて
も難しい妊娠であるとし
ての日の朝知らされたこと
を私に話しました。

で、今度の妊娠は意外なこ
とであったのです。

ちょうどその日の朝、今
回の妊娠と出産はこの前
の時よりもずつと厄介な
ことになるだろうとソ
コー口は医者から告げら
れていたのです。その医者
は、もし子どもが生きて生
まれても、重度の奇形か、
身体に障害を持って生ま
れてくることはほとんど
間違いないだろうと言っ
たのです。その上、ソコー
口の生命さえも危うくな
りかねないと言ったので
す。

医者は中絶しか手立て
がないと、それもできるだ
け早くしたほうがよいと、
彼らに告げていたのです。
ソコー口は、金曜日の午後
にその医者のところへも

う一度行く予定になっ
ていました。「神様がお許し
くださるのか知りたいの
です。たとえ子どもが健康
でなくても、私達は喜んで
その子の面倒をみます。で
も、母親がいなくては、そ
の子の面倒をみることは
できません。」とギルバー
トは言って、泣きだしまし
た。

彼は中絶が必要だとい
うことに間違いはないと
思っていました。重大な
罪になることを心配して
いたのです。

私は彼らに二、三質問し
ました。例えば、「赤ん坊
が身体に障害を持って生
まれてくると、医者がなぜ
そんなに確信をもってい
るのか」と質問すると、彼
らにはわかりませんでし

た。彼らは一人とも英語を
話すことも理解すること
もできません。

彼らが本当に知ってい
たことは、通訳が診療所
話してくれたことだけで
す。私に話したことの他に
はソコー口の状態を彼ら
は何も知らなかったの
です。彼らには医療保険があ
りませんし、どこへ行けば
他の医者と話ができるの
かわからなかったのです。

彼らにアドバイスする
前に、もっと情報を集める
ために、私はあと一日時間
をくれるように彼らに頼
みました。彼らは明日の
夜、同じ時間に来ることを
承諾しました。

木曜日朝、私は二ヶ所
のカトリックの病院に電
話をしました。私はソコー
口とギルバートの力にな
れる専門的な忠告を得よ
うとしたのですが、全くう
まくいきませんでした。電
話での話では誰も意見を
言っただけではありませんでし

た。急を要することではな
いのでソコー口を医者に
診せる約束が取れるには、
一週間ぐらいかかるだろ
うと言われました。

私は個人的に知ってい
る二人の医者に電話して
みました。二人ともその日
は空いていませんでした。
私は自分の失望した気
持ちとこみあげてくるや
るせなさを友人に打ち明
けました。彼女は私に「計
画出産を勧める会」(中絶
擁護派の団体)に電話する
ように勧めました。私は少
し驚きましたが、「そうだ
ね。」と答えました。

電話をした時、相手が試
されていると誤解しては
いけないので、自分が聖職
者であると告げませんで
した。そして、英語を話せ
ない親類の代わりに電話
をしているという事にし
ました。

電話で対応した女性は
とても感じよく、頼もし
く、私の話を熱心に聞いて

くれました。彼女は私にくらか質問をし、自分がすべてを正しく受け取っているか再確認しました。彼女は私にどう言えばいいかわからないので、午後電話をかけたおしといかと尋ねました。

木曜日の午後、私は会議に出ていました。私に電話がかかってくることを秘書に言うのを私は忘れてしまっていました。会議の最中に困った様子で秘書が入ってきました。「デイビッド神父様、計画出産を勧める会の方からお電話です。とても重要なことなので、お仕事中でも取り次いでくれてよいとあなたがおっしゃったと話しておいでなのですが」と彼女は告げました。

真つ赤になって、会議に出席している人の好奇の目に気づかないふりしながら、電話のところへ行きました。

「神父様、こんにちは。」

と、からかうような声が聞こえました。(明らかに、秘書が応対に出た時に私が誰なのか聞いたのです。)

「あなたとあなたの親類の方のお力になれるかもしれないことが見つかりました。」

彼女はソコーロの状態が本当にひどい合併症を引き起こしかねない情報を得ていました。そして、十分な治療と指導を受けなければ、赤ん坊が母親、あるいは両方にとつて、良くない結果になる可能性が大きいということでした。

ソコーロとギルバートが聞いた情報は間違つてはいなかったのですが、充分なものではありませんでした。

彼女は、実際に重症の糖尿病の女性の多くが妊娠し、健康な赤ん坊を産んでいると、私に言ってくれました。彼らには綿密な医療管理が必要です、ダイ

エツトや薬物治療などには細心の注意をしなければなりません。その上、一日に何度も自分の血糖値をチェックする必要があります。

最後に、彼女は難しい妊娠を専門に扱っている産科医と話をし、無料でギルバートとソコーロの力になってくれる同意を取りつけたと話してくれました。彼女はこちらの都合を聞かずに二人に会う日を決めてしまっていて、それが金曜日の朝、つまり翌日だったのです。

ソコーロとギルバートが、木曜日の夜私のところに来た時、私が知りえたことを二人に告げました。

今度泣いたのはソコーロでした。「中絶しなくていいのですか。」

私は彼女に自分の身体に気をつけて、赤ん坊が生まれるまでただの一日も休むことなく、どんなに小さいことも医者

に従わなければならないことを告げました。

彼女は意を決した眼差しで私を見て、「私何でもします。」と言いました。

ソコーロとギルバートは、私が教えてもらった医者におよそ一年ほどして、執務室にいと、誰かが私を訪ねてきました。立派な、大きく健康そうな女の赤ちゃんを抱いたギルバートとソコーロでした。

「クリスティーナの洗礼のご相談に参りました。神父様にこの子に会っていただきたくて、全てがうまくいったことをお知らせしたくて参りました。」と、今度は私が涙を必死にこらえる番でした。

今、中絶についての記事を

を読んだり番組を見るたびに、ソコーロやギルバートやクリスティーナのことを思い出します。

私は疑問を感じずには

いられません。「なんとか

して子どもを産もうとする中産階級の白人の勇気が讃えられる時でさえ、貧しい人や少数民族の人は中絶するように仕向けられるのだろうか。

「望まれない子」は、本当に、いつも望まれていないのでしょうか。実際に、この子達を望んでいないのは、いったい誰なのでしょう。

人々は、貧しく教育を受けていない人達には我が子のために犠牲を払った知性が欠けていると思っているのでしょうか。外見上の、中絶を選択できる権利の陰にいったいどれだけの多くの人種差別と階級差別が潜んでいるのでしょうか。

もしもソコーロが本当に私の親類で、つまり私と同じくヨーロッパ系アメリカ人だったら、きっともっと多くの情報を得て、中絶するようプレッ

シャワーをかけられること
ももつと少なくて済んだ
でしょう。

この出来事は、中絶を嫌
悪している私に、本当の隣
人は誰なのか考えさせる
きっかけになりました。わ
ざわざギルバートやソ
ーローが赤ん坊を持てる
ように喜んで力を貸して
くれたのは、計画出産を勧
める会の人だったのです
から。

おそらく、中絶問題に対
する新しい解決方法が必
要なのでしょう。難しい選
択を迫られた人達に、思い
やりの心を持って、そして
現実に即して対応できる
方法を捜し求め始める必
要があるのでしょうか。

私にはただ、中絶反対の
人達が、すべての妊婦に質
の高い医療を保証される
ことを願って集まり、貧し
く社会の主流から外れた
親のもとに生まれてきた
子ども達にきちんとした
機会を保証されることを

求めて運動し、どの子ども
生で成功する機会が持て
るように運動していくこ
とを期待するだけです。

私達が中絶のことを口
にする時、概念だけを話し
ているのではありません。
現実が存在する、伝え、困
惑し、心配している人間が
対象なのです。

「生きる権利」に賛同し
てくれる人が、それぞれ真
に経済的に、思いやりあ
る、現実になつた支援を
して、貧しい家族がある
は、一若者を、助ける責任を
引き受けてくれれば、本当
の変革を遂げることがで
きるでしょう。

デイビッド・

リナース神父

天使の歌

ナデインは子ども、少
女、女性です。ダウン症で
ある人の歳を判断するの
は難しい事です。そして彼
女が私達教会に集う仲間
にもたらした喜びを言い
表すのは、もっと難しい事
なのです。

教会の真ん中に行けば、
ナデインを見つける事
が出来ます。いつでも。み
んながいつしよにお祈り
する時でも、彼女がそこに
居るのがわかります。ナ
デインのお祈りは長引
いたり、言葉が多少不明瞭
だったりします。心をかき
たてるパイプオルガンの
音が教会にあふれると、ナ
デインの声もともにあ
ふれます。音はずれタイ
ミングもずれますが、堂々
と。

彼女の存在と信仰心は、
私を感動させてやみませ

ん。

私達は教会から帰る時、
何人かはどんなにナ
デインの歌を楽しんだ
かを彼女に伝える為に立
ち止まります。そしてその
内の幸運な人が、ナデー
ンから抱きしめられキス
されるのです。

神の目から見れば、ナ
デインは完璧な人です。
彼女こそ無条件に愛し信
頼する人だからです。彼女
は、神が私達にただこう
あつて欲しいと伝える
為に地球に遣わされた、天
使なのです。

そして私が彼女の歌を
聞く時はいつも、私の目に
は涙が浮かんできます。そ
れは私が彼女がかわいそ
うだと思っっているという
事ではないのです。彼女の
笑顔を見れば、彼女のこと
をかわいそうと思わなく
てもよいのが確かに分か
ります。この涙は単に喜
び、自分が疑いなく神の存
在の中に居ると知る時に

心からあふれ出る喜びの
涙なのです。

天使が居る所ならどこ
にでも、神もおいでだから
です。

ケイト・パフェット

24時間「母」でいるべきか

結婚するまで私は、母親になつたら家庭に入り、子どもと一緒にいようと漠然と思い描いていた。ところが長女ケイトが生まれ、それまで想像もしなかつた複雑な思いにとらわれた。数ある選択肢の中から、なぜ自分は専業主婦を選ばつとしているのか？

各自の専門分野をいやすことが大事とされる今の時代、女性がみんな育児で家庭に入ることはないと思う。文字、数、形、遊び、歌、社会性などを子どもに教えるのは、幼児心理や教育の専門家に委ねた方がいい。そういった組織や団体が喜んで引き受けてくれるだろう。

計画通りに行動し、有能で器用で用意周到で、笑顔絶やさぬ努力までして、

良い母になるべきだろうか？私は必要ないと思う。愛と祈り、特に祈りの力によつて、きちんと導かれていくと信じている。

また、最近の女性はかつての日本の母よりも多様な能力を持つ人が多いので、ちょっとした育児の作業は誰かに頼り、その分、自分の能力を仕事で十分発揮すればいい。鼻水をふく、おしめを替える、昼食を与えるなどは誰にでもできる。夜、家に帰つてから子どもとの貴重な時間を大切にすればいいのだから。

ヨハネによる福音書の第13章にこうある。「父は自分の手に万物をゆだね、自分は神から出て、神に帰ることを知っておられたイエスは、食卓から立ち上

がって上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰にまとい、それからたらいに水を入れ、弟子達の足を洗い、またつた手ぬぐいでこれをふき始められた」。

彼らの足を洗い、上着をとって再び食卓につかれたとき、イエスは言われた。

「あなたがたに私のしたことがわかるか。あなたがたは私を先生または主と言つ。それは正しい。その通りである。私は主または先生であるのに、あなたがたの足を洗つたのであるから、あなたがたも互いに足を洗い合わねばならぬ。私のした通りするように」と私は模範を示した。」

聖書のこの言葉は、我々も子ども達に仕える僕になるべきだと教えてくれ

る。

教師をしている友人が以前参加したセミナーで、出席者全員につきのようにな問いかけがあつたという。「皆さんの中で大家族で育つた方は？」かなりの手が挙がつた。「では、皆さんの中でお母さんと一対一で長い時間過ごした記憶のある方は？」手の数は極端に減つた。「つまり、自分が仕事をしているの子どもと一対一で過ごす時間が充分持てない、と心配することはないのです」という結論が出た。だが私の考えは違つ。母親が家にいる環境で育つた我々は、いつもそこに母がいるとわかつていた。わざわざ時間をさいて隣に座り本を読んではくれなかつたが、必要な時はいつでも助けてくれると知つていた。母は私に「質よりも量」の時間をくれた。神と同じように。痛み、苦しみ、発見、喜びなどを抱え

てやってくる子ども達のことを、神はいつも同じ場所待っていて下さる。神が与えて下さるのは貴重な時間ではなく、無限の時間だ。

先日のミルウォォーキー・ジャーナル紙に、私の意見に非常に近い、子育てに関する記事が出ていた。社会学者カール・シンスマイスター氏による、誰が子どもを育てているのかから引用させていた。

「愛がなければ到底できないようなことを、他人がお金で引き受けて成り立っているのが、有料の託児所だ」

「血のつながりのない子どもに対して強い愛情を持ち、ささいな兆候も見逃さず、その子を単に生かすだけでなく、本気で育てようとする。ただ、『ため』と言つのではなく、その理由もすっかり教える。わずかな進歩でも思いきりほめてやる。見逃してもそのつ

ち直ると思われる小さな

癖も、あえて口づるさく注

意する。無償の愛情を注ぐ

：これらができる人材を

探すのは、この先どんな法

律ができ助成金が増えよ

うが困難を極めるだろ

う。」

「子どもと親は血と運命

によって永遠に結ばれて

いる。託児所はあくまでも

ビジネスだ。ベビーシッ

ターは子どもと仲良く遊

び、責任をもって預かって

くれるが、それ以上を求め

られない。」

「子どもの性格、道徳観、

将来の目標、愛とは何か：

それを教える役割まで肉

親以外に委ねるのは無理

がある。」

最後に一言、母親には安

心して構えていてほしい。

とはいえ、疑問や心配や不

安が生じることもあると思

う。

るう。

「今日は野にあり明日は

かまどに投げ入れられる

草をさえ、神はこのように

装わせられる。ましてあな

たがたによくしてくださ

らぬわけがあるうか。信仰

うすい人々よ。何を食へ、

何を飲み、何を着ようかと

心配するな。それらはみな

異邦人が切に望むことで

ある。天の父はあなたたち

にそれらがみな必要なこ

とを知っておられる。だか

ら、まず神の国とその正義

を求めよ。そうすれば、そ

れらのものも加えて与え

られる。明日のために心配

するな。……」

テレス・スラタリー

命とはいつてもよい知らせである

ローマ法王の新しい回

勅である。「命の福音」は

本当に素晴らしい知らせ

です。ローマ法王、ヨハネ・

パウロ二世は、新しい生の

文化に向けて取り組む意

志を明らかにしました。こ

れは一九九五年と一九九

六年を対象としたささや

かなプロジェクトではな

く、長期にわたる目標なの

です。教会はその仕事のた

めに専心しているのです。

その書簡は四部から

成っています。生命に対す

る攻撃の分析、聖書と、キ

リストおよびその使徒か

ら伝えられた教訓の中の

生命に関する神の啓示に

対する考察、「汝、殺すな

かれ。」というモーゼの十

戒の一つの戒めを今日の

問題に適用させる揺るぎ

ない教え、そして最後に行

動への呼びかけ、から成っ

ています。

A 命に対する

脅威の分析

生の文化に敵対して巨

大な力が勢揃いしていま

す。ローマ法王は、今日の、

命に対する脅威は昔と

違って量的に増えている

ばかりでなく、質的にも異

なっていて、新しい残忍な

行為を伴っている」と説明

されています。歴史を通し

て殺人はずっとありまし

たが、今日、政府に殺人が

力は組織的な攻撃にさら

されています。私達は命を

守るための大きな運動を

促進するために、大衆の良

心を結集させ倫理的な努

力を結束させる必要があ

ると、法王は述べられてい

ます。

B 考察：なぜ生命はす

ばらしいものなのでしょ

うか。

教会は生命はいつもす

ばらしいものだとして教

えています。この基本的な教

に促されたり、ただ単に殺されたりしています。物質主義的な文化において、苦痛は意味の無いものだとみなされています。従って、生命はいつもすばらしいものだといふ、一見ありきたりに思われるような表現が重要になってくるのです。

生命はすばらしいものです。というのは、それぞれの人には、「この世における神の現われであり、神の存在のしるしであり、神の栄光の足跡」であるからです。その源が神にあり、それが永遠の生命の始まりであるから、人間の生命は貴重なものです、とローマ法王は説明されています。

C 「汝、殺すなかれ」

ローマ法王は、正式に権威を持って罪の無いものを殺すことは、いつもまちがっているとして述べられています。そして昔の戒めには中絶と安楽死はしては

ならないといふことが含まれています。殺すことが悪であるといふことを注意して述べておられることは驚くべきことではありませんが、それは、法王が人体実験を含めて述べられているので興味深いのです。人間の胎児の研究は、人間を単なる研究対象として造ったり、捨てたりしているの、悪なのです。

今日、多くの人々、中絶反対運動家の中のいくらかの人々も、中絶は悪という考えを持ちながら、一方で、レイプの場合や、母親の命が危ない場合には多くの殺人を見過ごして妥協しています。それとは対照的に、法王は、最も幼い、生命が始まって数日からの胎児に当てはまる憂慮を示されています。手の指や足の指や、鼓動する心臓がなくても、胎児はすでに神に似せて造られた人間なのです。

D 行動を求める

呼びかけ

死の文化に直面して、私達は何をすべきなのでしょう。法王の計画は、法律を改訂すること、養子制度などの代替手段を提議することや、教育に基づくものだけではなく、福音を伝えることを求めているのです。それは言葉だけの問題ではありません。私達は、生命の福音を宣し、その通りに行動するよう求められています。法王は詳細に私達がどのような行動を取れるかを説明されています。ここにいくつかの説明があります。

法王は、慈悲が現実的なものになるためには、生命の福音が政治的に実行されなければならないと述べられています。政治的な行動を説明する時、法王は、「生命に対する権利を回復すること」について話

されているではありません。どうして海や空や生命に対する権利のような、「回復」できるのでしょうか。そうではなく、法王は、人間の権利は神によって与えられたものであり、いかなる法令よりも根本的なものであることを指摘されています。法王は、不当な法律は拘束力がない、というアウグスティヌスやアクイナスの教えを、正義からはずれた法律や判決は、全く本物の司法的妥当性を欠いている」という教えを再びはっきり述べています。そのことは子どもを死から救う人々は投獄されないという意味ではありません。それは実際

は、国家が胎児の生命を守ることを拒否する時、思慮深く従順な人々が十分な良識を持って、国家の権威を無視できるということの意味しているのです。法王は老人のことを大

いに気づかわれ、特に病院や老人ホームの役割を再評価することを求めておられます。そのような施設はしばしば倉庫になってしまふことが多いのです。この大きな悲劇に対して、法王は病院は苦しみや死というものが認識され理解される場所でなければならぬと力説しておられます。最も大きな苦しみは肉体的な苦痛というよりはむしろ、それに伴う無力感なのです。苦しみが持つ価値の大きさを理解している人は、無力感を感じることはありません。従って、安楽死を勧めたりすることはしません。

ローマ法王は私達に次のように説いておられます。「急を要することは、生命を擁護する大きな運動を活性化させるために、大衆の良心を結集させ、倫理的な努力を結束させることです。」力を合わせて、私達は新しい生の文化を築

神様が与えた解決策

かなければなりません。その文化は、人間の生命に影響を及ぼしている今日の前例のない問題に立ち向かい、解決できると思われるので、新しい文化なのです。またそれは、すべてのキリスト教徒によって、より深まりのある、より力強い確信をもって採り入れられると思われるので、新しい文化なのです。また、それはすべての立場の人々の間に、真剣で勇気ある対話をもたらすことができると思われるので新しい文化なのです。このよ

うな文化の変革に対する急務は現在の歴史的状況と関連がある一方で、それは福音を伝えるという教会の使命に根付いているものなのです。福音の目的は、実際、人間を内部より変革させ、新しいものにするることなのです。

ジョン・オキーフ

神様は私達に胎児とその母親を助ける多くの機会を与えてくれますが、最初はどの機会がより良いものなのかはつきりしない事があります。少なくとも私にはいつもそうでした。

大学で教鞭を取った経験と人文学の博士号を持つている私は大学で仕事をすることが、中絶反対運動に従事する理想的な方法だと思いました。その仕事で私はそつと中絶反対のメッセージを広める事ができるからなのです。私は討論会に参加したり、私の考えを手紙にて学生が作る新聞に知らせたりしました。出産後の母親と子どもを考慮していないと私達、中絶反対運動家を非難する、中絶選択権

擁護派の人々に迫られた時、私は次のような話をするので。

数年前、私の母が私達と同居していた時、母の健康状態がひどく悪化し、昼間母だけにしておくことができなくなりました。私達には助けが必要でした。そこで、私達の中絶反対の確固たる思いと私達の必要とを結びつけて、私は地元の中絶反対運動センターを訪ねました。昼間、母と一緒にいてもらう事と引き替えに、私達は貧しい妊婦の女性に家を提供したので。

私達の求めに応じてくれた最初の女性の名前はドロレス、妊娠四ヶ月の若い女性でした。彼女はもう、いままでのきつい清掃の仕事はできませんでし

た。彼女に手伝ってもらって、私達は空いた部屋のペンを塗り直し、彼女はそこへ引っ越してきました。

さて、母には昼間一緒にいて、着替えの手伝いをし、食事を作り、家の雰囲気、食事を明るくしてくれる人ができました。私達は家事の分担をしました。全員が自分の部屋と、みんなが使う場所は交替で掃除する事にしました。しばらくして、私達が一週間家を不在にした後帰ってくると、ドロレスは私と夫に彼女の困っていること、主として交通が不便で、身動きがとれないと伝えました。私達はバス路線から遠く離れた所に住んでいて、ドロレスには車がありませんでした。その問題を解決するために、私達はドロレスの

三ヶ月後に出産予定の十代のケリーを私達と一緒に生活できるように手配しました。二人は非常にうまくやってゆき、ドロレスに男の赤ちゃんが生まれた数ヶ月後、彼女と彼女に、ついで女の赤ちゃんの生まれたケリーは私達の家を出て、町のアパートで共同生活をしています。

もちろんこの経験も私達にとっては勉強になりました。私達はさらに二人女性を助ける事ができました。二人とも三十代で、彼女達の妊娠には少々問題がありました。私達には空き部屋があったので、彼女達を招き入れて住ませ、いくらかの計画を立てさせました。彼女達は母の話相手となると約束し、その約束を果たしてくれました。二人ともかわいい健康な赤ちゃんが生まれています。

やがて私達は神様のおぼしめしによって、さらに

四人の母親と赤ちゃんの援助をすることができ、そのようにできたことを大変感謝しています。私は自分がもともと求めていた中絶反対の取り組みと違った種類の取り組みをすることにになりました。神様は私に中絶反対運動の生きた手本となることを求められました。そして、私の経験から、生徒が人間の命の価値について何かを学ぶであろうと私は信じます。

Celebrate life 7-8/95

9月

Pro Life Hero

丁度、一年前になる6月18日、一通のお手紙が事務所に届きました。名古屋にお住まいの泉初実様からでした。

自分の体験が、若い人達の過ちを救う何らかの手助けになりたいので、何をしたらよいか教えて下さいというものでした。あれから、一年。彼女は、私達のニュースを30部取って下さり、所属する教会に、毎週少しずつ置き続けてくれていきます。一時、一度にたくさん置いたことがあったそうですが、次の回には全部なくなってしまうと、捨てられてしまったかもしれないと思っただからです。

今、彼女の手紙を読み返して見ると、彼女のこの運

動へのきつかけは、静かなるホロコースト」を読んだためのようです。そして、わが子の出産にまつわる出来事を通して、神様が彼女を教会へ、そして、この運動へと誘われたようです。

妊娠している時、彼女は医者さんから、お腹の子は盲目か、低能になると言われ、若いのだから次の子に期待しなさいと言われた。産まれた子どもは一〇九五グラムの超未熟児だったため、十年たった現在、体は小さく、呼吸器が少し弱い以外は目も、頭も何の障害もない、素晴らしい子どもです。神様のおぼしめしか、子どもは独りで、あの時あきらめていたら、どんなに後悔しただろうと思われるとおっしゃっておられます。

結婚前、妊娠を恐れた彼女が、もし、あの時、この子の前に、妊娠していれば、どの道を選んだらう

かと考えた時、同じ両親から生まれる子どもは、なのにな、一方は無条件に愛され、受け入れられ、一方は恐れられ、いやがられる。

彼女は、多くの若い人が、無知と世の中にあふれている、悪しき情報に踊らされて、尊い生命を、闇に葬っていることを考えると悲しみに絶えまじいとおっしゃって、今週も、次の週も、ニュースを置き続けてくれていきます。

(大岡滋子)

『中絶を止めさせる二つの方法』

中絶という大虐殺を止めさせる一つの方法は、法律を変えることです。そしてそれが私達の最終的なゴールです。そのために、私達は教育し、教育し、とにかく教育しなくてはならず、教育こそが私達が最も努力し続けなくてはならないことなのです。そして、祈りもまた重要です、奇跡に頼っていると、いう事ではないのですが、奇跡は実際に起こるので、神はよく色々な人間を通して働きかけてくるのです。時には私達が最もあてにしている人間を通して。

「回心」とは私達が時々使う言葉ですが、ごく最近オハイオ州デイトン市でその「回心」が起こりました。その人は有名な墮胎医

でした。ローレンス・クルド先生です。彼はデイトンの女性センターで数多くの中絶を行っていました。その殺人センターの一部所有権を持っており、一九八一年から約四千の罪のない命を奪ってきました。彼は時には私の住むシンシナティ市までドライブして来て、その不快な仕事をしていました。両方の市の中絶反対家たちは彼を監視し、私達は彼を悪魔として見ていました。私達は変化が起こることをあまり期待していませんでした。

私は何が彼を動かし、彼の週末を宗教的に変えたのか詳しくは知りません。ただ、彼は明らかに深く動かされ、彼の人生が変わったことだけは確かです。クルシリオとはスペインが起源の人の信念が激しく試される長い週末のことです。この数日の間で、躍動的な体験が何千、

何万という人々の人生を変えました。本来はローマカトリック教の行事でしたが、このクルシリオは変化し、異宗派間の体験へと広がっていき、「エマウスへの散歩」と改名されました。そしてこの体験がクルド先生を変えたのです。

その週末の間、彼は自分の良心の葛藤に直面しました。そして初めて何千という人々が自分のために祈っているということに気がつきました。その週の後、彼は「私はクリニックに入ろうとしたが入れませんでした。腕が重くなってきたのです。次に心臓が苦しくなってきました。キリストが私にそれをやってはいけないと伝えてきたのです。」と言って、振り返ってそこから去って行ってしまいました。彼はこう続けています・「職場の他の人達は私を狂っていると叫びましたが、私は気にしません

でした。私は今までは自分の人生の中心に自分だけを置いていたんです」。そして、彼は止めました。彼は近くの都市に引越して、正当な産科学と婦人科医学を行うようになりました。彼は最近「生命の権利」会議で講演を行いました。彼は自分の「回心」を祈りの力のおかげであると言います。それからというもの、私の人生は喜びで満ち、イエスを知ることができた喜びに祝福されているのです」と言っていました。

ジョン・ウィルキー

医学博士